

全体ディスカッションを終えて

研修委員会

平野 潔

今僕は、相談支援専門員という立ち位置から（少し離れて）作業所を見ている。

地域の、どの作業所も訪問の折「良い仕事をしているなあ」とハツとさせられることがあるが、それらは往々にして制度の外に生じている気がする。そのことをあるベテラン相談支援専門員に告げると『そうだよ』と共感してくれたので、その思いは僕だけではないことと思う。現場では制度に抗い、折り合いをつけ、それでも葛藤しながら今を営んでいる。その苦労が、作業所の文化となって紡がれていく。そんなことを思いながら学会に臨んだ。

『我々は、福祉の名の下に、いともたやすく他者の境界を侵襲する。このことをどう捉えているか？』全体ディスカッション開始直後に増田先生から投げかけられた『バウンダリー（境界）』についての問いは、鋭い棘となって僕に突き刺さる。前日のある法定研修におけるスーパージョン講義や、かつて支援の刹那に当事者が見せた複雑な表情、そして事故で死にかけた僕をへ赤子のように扱った看護師のことなどが想起される。他者との相互関係によってケアが成立していることを鑑みれば、その関係の中にどのように入り込んでいくかということテーマに考えていた僕は混乱してしまっただ。それではケア・福祉（サービス）の領域の危うさの中で、我々はその中において尚、どのように関係を紡いでいけばいいのだろうか。否、紡いでいっても良いのだろうか。

さて、第一分科会では、『意思決定支援』をテーマに当事者の皆さんの語りを聞いた。作業所では、言いたいことが言える関係の中、それでも当事者が「あえて言いたいことが言えた」ということ、そ

してこのことが＜非日常＞の出来事であるということが再確認された。『先回りして』考えられてしまうという歯がゆさ、そしてそれでも当事者と支援者のあいだを埋めていくための、コミュニケーションを続けていく覚悟が、印象的であった。

第二分科会『就労支援』では、作業は支援の＜手段として＞当事者がまずありきでその内容を検討されるということ。仕事に諦めない（チャレンジできる）、希望を持てる場所である、自分らしさに気付ける場所であるということ。人の存在は他者によって与えられるということ。踏まえて、語弊を恐れずに言えば作業という＜場所＞を作り上げていくということだと了解できるものであった。

第三分科会『地域生活支援』では、当事者の結婚を通じて、「人が人を好きになる」というあたりまえの行為が、障害者という枠組みの中では特別になってしまうということ、あたりまえの権利を取り戻す、あたりまえを支えるということの大切さが語られていた。あたりまえの暮らし。そこに連なる『小さな願い』の積み重ねがその人の人生を彩るのだと、事例は雄弁に物語っていた。

村上先生は、最後まで僕たちの話に耳を傾けてくれた。先生の言葉借りれば、

『当事者が人生の主導権を自分自身で握れるようになることが、困難な状況のなかでのケアのゴールだ。このような場面でのケアラー（支援者）の役割は、場の安全を守り、当事者の語りに耳を傾け、当事者が選択した行為で失敗したとしても迎え入れ、再出発を応援する。そのような一連の行為の証人となることだろう。証人は、ただそこに居るだけで、何らかの変化を生む触媒となる。ケアラーは言語化の触媒であり、行為の触媒でもある（著書…「ケアとは何か」

PI75)』ということに尽きるのだろう。

僕たちは、その証人であることから逃げない。なにもできずそこに立ちつくすということがあっても、逃げない。逆説的だが、そこから逃げようとする行為や甘えこそが、他者の境界に影響を与え、侵襲を感じさせるのではないか。だからこそ、その覚悟と誠実さを以て行うことが大事なのだろう。

全く至らない僕の技量不足によって、まとまりのないディスカッションになってしまった。

そのまとまりのなさに耐え、付き合ってくれた村上先生、登壇者の皆さん、そして会場の仲間たちに感謝いたします。

